

インタビュー

現場の声①

飼養成績向上を目指す 事故率低減の試み

現場の声②

農場の衛生管理向上に向けた これからの課題

(有)ブライトピック／(有)ブライトピック千葉

執行役員部長・獣医師

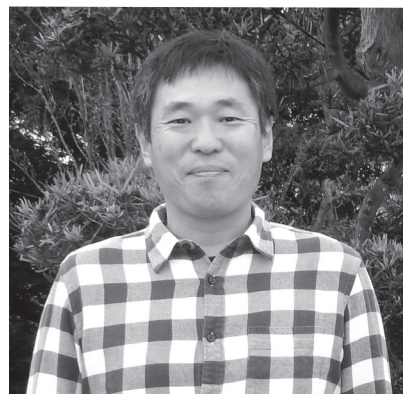
北條那智氏に聞く

飼養成績向上を目指す 事故率低減の試み

(有)ブライトピック／(有)ブライトピック千葉
執行役員部長・獣医師 北條那智氏に聞く

養豚経営において飼養成績向上によるコスト低減を図り、生産性や収益性を向上させるには、農場内で豚の疾病発生を最小限に抑えるための衛生管理、さらには事故率低減も重要なポイントの一つとなる。本稿では、養豚業のリーディングカンパニーである(有)ブライトピック（本社：神奈川県綾瀬市吉岡）／(有)ブライトピック千葉（本社：千葉県旭市南堀之内）で、ブライトピックグループの農場すべての豚の管理に獣医師として携わっている北條那智氏に、農場内における豚の疾病について浮腫病対策を中心にお話を伺った。

（編集部）



北條那智氏

ブライトピックグループの概要

1971年に設立された(有)ブライトピック（本社：神奈川県綾瀬市吉岡）ならびに1996年に設立された(有)ブライトピック千葉（本社：千葉県旭市南堀之内）からなるブライトピックグループは、神奈川県内と千葉県内に合わせて9農場の拠点を構え、高能力種豚（TOPIGS）の大ヨークシャー（W）とランドレース（L）を交配させたWLの母豚を自社農場で生産。安全・安心、高品質な豚肉を安定供給し続けている。

農場の防疫強化を重要視し、疾病による生産性の低下を最小限に抑えるためにマルチサイトシステムを早くから導入。繁殖から離乳までを行う繁殖農場と育成肥育を行う肥育農場に分け、繁殖から肥育、出荷まで一貫して安全性と生産性の高い豚肉づくりに取り組んでいる。現在、

グループ全体ではおよそ母豚6,000頭規模。飼養頭数は離乳から肥育まで合わせると約6万5,000頭を飼育している。

——農場内で問題となっている豚の疾病、現在の農場事故率についてお伺いします。

北條 やはり一番多く見られる疾病は豚繁殖・呼吸障害症候群（PRRS）です。9農場のすべてがPRRS陽性農場、その中で生産成績をコントロールしようとしているのが難しいところです。この季節に治療が多い疾病は肺炎です。ベースにPRRSが存在していて、さらにマイコプラズマなどが重なり咳などの呼吸器症状が出てくるケースが多いかと思います。

離乳子豚期でいえば、多く見られるのは下痢です。加えて浮腫病であったり、連鎖球菌症であったり、あとはグレー

サー病であったり。どちらかといえば、クラシックな疾病にも手を焼いているような感じでしょうか。

現在、ブライトピックグループ全体での事故率は10%前後で、30kg以降の肥育期での事故が多いのが悩みの種です。経済的に良くないですね。万が一、疾病が発生した場合には、発生した疾病ごとにそれぞれの対策をとることになります。

——増体量低下の要因ともなる浮腫病について、農場での発生状況と対策はどのように実施されていますか。

北條 浮腫病^{※1}については50日齢前後での発生が多いと感じています。一番初めに起立不能のような感じの症状が見られます。豚房の中に倒れ込んでいる豚がいてよく見てみると歩様がおかしい、こういう豚が何頭か散発的に出てくるというパターンが多かったです。症状が強く出たりすると、眼瞼浮腫などの症状を示している豚も見られます。

ただし、浮腫病はワクチンを打てばほとんど症状は見られなくなりました。飯岡農場と第二農場では長期にわたって浮腫病による被害を受けていましたが、ワクチン投与後、飯岡農場に関してはまったく発症していません。第二農場に関してはゼロにはなっていませんが、投与前のような被害は見られません。大腸菌症もそうなのですが、浮腫病も徐々に広がっていくように発生が見られます。うちは急性症状で出てくる場合が多かったので、発生を事前に見つけるのはむずかしい状況でした。

予防対策として、2021年6月初旬より浮腫病ワクチン「ベピユード[®]」^{※2}を打ち始めました。約3日齢、分娩処理



眼瞼周囲の浮腫

の際に投与を行っています。投与頭数はグループ全体で毎月1.1万頭程度です。浮腫病ワクチンが発売されるという情報を聞いてから、ずっと発売日が気になってディーラーさんから話を聞いていました。

※1 浮腫病：シガ毒素産生大腸菌が起す腸管毒血症の一つ。離乳後1～3週に多く発症が認められ、典型的な症状としては、神経症状、眼瞼周囲や前頭部の顔面に浮腫を呈する。肥育段階でも発症することがある。

※2 ベピユード[®]は、イブラ・ジャパン合同会社より2021年5月から発売開始された浮腫病ワクチン。2日齢から投与可能、出荷まで免疫が持続し、出荷日齢の短縮が期待される。なお、投与方法は1ショット1mlを筋肉内注射。

——実際にワクチンを打ち始めてから浮腫病については改善が見られましたか。

北條 ベピユード[®]を打ち始めてからは、ほぼ浮腫病の発症は見られなくなりました。ただし、ゼロではありません。確定診断はしていませんが、状況から見て「恐らくそうであろう」というケースは指折り数える程度です。

投与期間の浮腫病発生率については、まだきちんと調べていないのですが、例えば、肥育では4農場でベピユード[®]を

表1 ブライトピック第2農場 ロット別成績表(抜粋)

	離乳舎				肥育舎			合計	
農場	導入日	導入頭数	事故頭数	事故率	導入頭数	事故頭数	事故率	事故頭数	事故率
東庄	2020 6/15	2769	41	1.48%	2728	362	13.27%	403	14.55%
森戸	2020 6/14	1406	25	1.78%	1381	202	14.63%	227	16.15%
合計		4175	66	1.58%	4109	564	13.73%	630	15.09%
東庄	2021 6/17	2566	29	1.13%	2537	191	7.53%	220	8.57%
森戸	2021 6/16	1328	13	0.98%	1315	76	5.78%	89	6.70%
合計		3894	42	1.08%	3852	267	6.93%	309	7.94%

投与していて、浮腫病の症状が稀に見られるのは1農場だけです。その他の農場においては、ほぼ発症ゼロとなっています。浮腫病が出てしまうこの1農場は、浮腫病以外も含めた事故率はだいたい1%ぐらいですが、ワクチンを打つ前の悪かった時の事故率は現在の3～4倍程度高い数字でした。ただ、浮腫病だけで考えれば、もう少し事故率は低いのであろうと考えています。

ざっくりとした計算ですが、予防で使っている添加物三つの使用をやめれば、ワクチン代の半分程度のコストは回収できています。

——浮腫病以外の豚のワクチン投与の状況について伺います。

北條 農場ごとに状況が違うため、グループ全体でワクチンの統一はしていませんが、現在はマイコプラズマ、PRRS、サーコ、浮腫病、CSF（豚熱）、オーエスキー、APP、豚丹毒ワクチンを投与

しています。

オーエスキーワクチンについては、スタート時に周辺でいっせいに始めたこともあり、止める時もいっせいにやめたいという考えが個人的にはあるのですが、新型コロナの影響などで、周辺の生産者の皆さんと顔を合わせる機会がとてまもなくなくなり、情報が入りにくくなったことで止めどきのタイミングをはかっている状況です。

——今後の事故率低減に向けた目標について伺います。

北條 今後は、離乳舎は2%以下、肉豚は5%以下、合わせて事故率7%以下に抑えることが目標です。疾病対策という意味では、浮腫病ワクチンもそうですが、連鎖球菌ワクチンが発売されたのでコントロールがしやすくなってきたと思います。

農場の衛生管理向上に向けた これからの課題

(有)ブライトピック／(有)ブライトピック千葉
執行役員部長・獣医師 北條那智氏に聞く

前号に引き続き、(有)ブライトピック（本社：神奈川県綾瀬市吉岡）／(有)ブライトピック千葉（本社：千葉県旭市南堀之内）で、ブライトピックグループの農場すべての豚の管理に獣医師として携わっている北條那智氏に、農場内における衛生管理についてお話を伺った。

同社では大規模養豚を行う上で徹底した防疫対策を実施し、オールイン・オールアウトや14日間という長めの空舎期間を設けるなどの徹底した衛生対策を実施している。



（編集部）

北條那智氏

——ブライトピックグループ9農場の施設によって事故率の違いなどはあるのでしょうか。

北條 それぞれの農場にある豚舎施設はグループ内で統一されているわけではありません。まだ古い農場もあり、昔ながらの開放豚舎でカーテンを手動で管理している豚舎もあれば、ウインドウレス豚舎で自動カーテンの農場もあります。繁殖農場では平均26日齢で離乳後、肥育農場（離乳舎、肉豚舎）に移動します。離乳舎で26～70日齢程度まで飼育した後、肥育舎で出荷まで飼育しています。出荷日齢は平均180日齢程度、出荷体重は平均113kg程度です。

個人的には、グループの生産成績には改善の余地がまだまだあると思っています。飼料コストが他社と比較すると削減できていることにより、ベンチマーキングで粗利の数字だけをみると良く見えた

りすることもあります。事故率などで見れば決して成績が良いわけではありません。

農場によって疾病が発生しやすい、または事故率が高いといった衛生レベルの差はありますが、どの農場にも疾病の豚はいます。飼養技術の個人差など、事故が起きやすい農場と起きにくい農場に差が出る理由はいろいろとあるのだと思います。ただ、繁殖農場における母豚の衛生、疾病レベル、つまりクリーンレベルの差の影響が強いのではないかと考えています。

どちらかといえば、冬場の豚の管理よりも夏場の豚の管理に苦戦しておりまして、12月など寒くなる季節には、農場成績の数字が安定する傾向にあります。

——衛生管理についてお伺いします。

北條 農場のオールイン・オールアウト



(有)ブライトピック	生産形態
①本場(神奈川県綾瀬市)	一貫農場
②第一農場(千葉県香取市)	離乳肥育農場
③第二農場(千葉県香取市)	離乳肥育農場
④ —	—
⑤東庄農場(千葉県香取郡東庄町)	繁殖農場

(有)ブライトピック千葉	生産形態
⑥飯岡農場(千葉県旭市)	一貫農場
⑦GP農場(千葉県銚子市)	繁殖農場
⑧銚子農場(千葉県銚子市)	離乳肥育農場
⑨森戸農場(千葉県銚子市)	繁殖農場
⑩黒潮農場(千葉県銚子市)	肥育農場

ホームページ(<http://brightpig.co.jp/>)より抜粋

図 ブライトピックグループの農場

は棟単位で行っています。自分が入社した頃は、棟ごとでのオールイン・オールアウトはまだできていませんでした。その状態から徐々に改良を進めてきました。空舎期間は14日間を設け、洗浄、消毒、乾燥をしてから次の豚を入れます。サーコという疾病があったにせよ、ひどい時には30%以上の豚が事故になったこともありました。私が農場に入った頃はPRRSによる被害が甚大なこともあり、部屋だけではなく、豚舎ごとのオールアウトをかけるという考え方が社内に出てきたのは、その時ぐらいからですね。オールイン・オールアウトだとか、パーシャルデポピュレーション(部分的オールアウト)だとか…。

20年弱で養豚の業界もいろいろと変わってきています。例えば、豚の疾病とは違う話になりますが…。ここ1～2年で出てきた話で世の中にどれだけ浸透している情報かはわかりませんが、妊娠豚の分娩前に飼料の量を上げるということがこれまでは当然とされていました。私も当たり前のように感じていたのですが、いまアメリカでは増餌は必要ないという話もあるようです。入社したころに常識であったことが、今では違うということもまま起こります。

——今後、薬剤費は抑えていく方向に向かうのでしょうか。

北條 そうですね。CSF ワクチンも制度が変わって実質価格が下がりそうだし、ということもありますし、薬剤費が下がってくるのはこれからだと思います。ただ、薬剤費は下げようと思えばいつでも下げることができますが、生産性とのバランスを見る必要があります。

薬剤コストについても、昨年1年間は1頭当たり2,000円強でした。CSF ワクチンの投与が必要になってきたということもあり、今年は2,500円強まで薬剤費が上がっています。高いですね。

今後は抗生物質の使い方なども見直しをしなければいけないと思っています。現在の薬剤費コストはちょっと高すぎると思っているので、下げていくつもりではいます。やはり1頭当たり2,500円以下には抑えたいと考えています。

——耐性菌問題について伺います。

北條 浮腫病対策についても、「ベピュード[※]」の導入前は炭酸亜鉛5%、有機酸1.5%、生菌剤0.3%と、だいたいこの三つを飼料に添加して予防という形で与え

ていました。加えて、浮腫病が発症した際には、抗生物質を注射や飼料添加し更なる対応をしていました。

抗生物質については、疾病が頻発するステージにプログラム添加しているケースもまだ残っており、これはいずれやめなければならないと考えています。

生菌剤などの飼料添加剤のプログラム添加についても、近いうちにやめたいと思っています。それで手に負えないというようでしたら、また次の方法を考えますし、プログラム添加で十分に対応できるというのであれば継続も検討します。まったく使わなくしようとしているわけではありません。

コリスチンやテトラサイクリンが話題になっていますが、耐性菌問題には真剣に取り組む必要があると考えています。弊社ではテトラサイクリン系の使用については全て中止しました。

※ベピュード®は、イブラ・ジャパン合同会社より2021年5月から発売開始された浮腫病ワクチン。2日齢で投与可能、出荷まで免疫が継続し、出荷日齢の短縮が期待される。なお、投与方法は1ショット1mlを筋肉内注射。

——農場の事故率低減に向けての取り組みについてお伺いします。

北條 弊社において、一番のテーマは事故率を下げることでと考えています。昨年の冬場の事故率は月平均8%弱くらいでしたが、夏場の事故率は月平均で12～15%と夏場と冬場の事故率には大きな差があります。

農場の立地は、気候的には夏場は涼しい方だと思います。湿度は高いのですが、温度的には群馬県、神奈川県、埼玉県といった近隣県と比べるとかなり過ごしやすいほうだと思います。事故率を下げるためには、夏場の管理がキーポイントとなります。そこについては毎年のように

考えています。

例えば、農場で導入しているリキッドフィーディングは、理屈上は水・栄養が同時に給与できるので夏場の飼料給与には有利であるといわれていますが、弊社においてはなかなかうまくいかないところもあります。配合飼料だとまったく飼料を食べなくなったりもしますが、リキッドだといくぶんかは和らぐようです。それに加えて夏場は繁殖関係の問題もでてきます。母豚が突然死したり、繁殖率が下がったり。これは皆さんも同じだと思います。

——最後に、今後の課題についてお伺いします。

北條 離乳舎については、ずいぶんと疾病コントロールをしやすくなったのではないかなと思うのですが、問題は肉豚舎です。

肉豚舎の疾病コントロールの難しさは、夏場の管理というのもありますが。意外と離乳舎で良い感じに疾病コントロールができていると、肉豚舎に移動してからいっせいにウイルスが動き出すという場合があります。肉豚舎でたとえばPRRSに感染してしまうと、マイコなどもどうしても動いてしまいます。APPもそうです。こういった疾病が重なると、症状が重くなってしまいます。一方で、離乳舎でPRRSが動いてしまったロットが肉豚舎に行くと、そんなに事故率につながらなかったりする場合もあります。どちらがよいのかと言われてしまうと難しいのですが、豚舎内を歩いて「今日は元気だな」と豚を見ているだけですむのが一番良いのですが、なかなかそうはいかないですね（笑）。

——ありがとうございました。

